

交換留学報告書

国際関係学部国際関係学科

政治経済コース 4年

留学先：ボアジチ大学

現地での様子

イスタンブールはたくさんの観光地、美しいボスポラス海峡に囲まれた歴史ある土地です。海峡のあるおかげで、交通機関の一つとしてフェリーが大きな役割を担っています。公共交通機関カードの「イスタンブールカード」を使って一回およそ3リラ（60円ほど*2019年7月現在）で乗ることができます。晴れた日に乗るフェリーから見るボスポラスはとても美しく、勉強の息抜きには最適でした。



かつて巨大な帝国を築いただけあって、歴史的建造物が非常に多いです。宗教もキリスト→イスラムと変遷してきた歴史があるので、2つの宗教が入り混じった様子もトルコをめぐると思受けられると思います。





Rumeli Hisar と呼ばれる地区に大学のキャンパスが 3 つ点在しています。中でも南キャンパスは群を抜いて美しく、晴れた日にはたくさんの学生が芝生の上で座って話しています。私が宿泊していたのは北キャンパスにある寮でしたが、見かけは日本にある大学のようなデザインで無機質なものでした。3 つ目のキャンパスの Hisar キャンパスも同様です。寮はワンルームの 2 人共用の部屋でした。前期はトルコ人のルームメイトと過ごしていたのですが、英語で話すのがあまり好きではなかったようでコミュニケーションをとるのに苦労しました。生活リズムもお互い合わず、彼が部屋に戻ってくる音で私が起きるといふストレスfulな生活を送っていたので部屋の配置換えをお願いしました。後期はボアジチに留学に来ていたアメリカ人との共同生活でした。

大学の中には基本的に何でもそろっています。食堂、購買、書店、図書館などがよく利用していた施設です。大学周辺にもスーパー、レストラン、飲み屋などそろっているのので、私は 1 週間大学のエリアからでないこともありました。図書館は特によく利用していた施設です。24 時間空いているので、いつでも好きな時間に利用することができます。格安の印刷所も併設されています。授業に追われて大変だったときは一日中もっているときもありました。それだけではさすがに息が詰まるので、休みの日には友達とお茶をしたり、Couchsurfing というアプリで英語で話す会に参加したりしていました。日本に興味を持ってくれる方々はたくさんいたので、日本語を教えてもらう代わりに英語を教えてもらったり、文化を紹介したりしていました。

学んだこと

率直に申し上げますと、授業で学んだことはあまりありません。山のような課題を消化することに追われていて、英語力も確かに伸びたのかもしれませんが自分の中でそれは目覚ましい進歩と呼べるものではないような気がします。それに、トルコにいる間に自分が感じたことで大きかった部分はそこではありません。最も大きかったのは、トルコという国に身を置いて、「社会の中でマイノリティになるとは何を意味するか」を学べたことです。トルコの公用語はトルコ語なので、英語は基本的に通じません。滞在が許可されているとはいえ、公益なサービス（医療など）を受けるためにはトルコ語を話す必要がありますし、どこに行くにも私の場合はトルコ人の友人がいないと非常に苦労しました。また、街中を歩いていると「ニーハオ」「チンチョンチャン」などといった差別的な言葉をかけられ不愉快な気持ちになることも多々ありました。トルコの中で「外国人」として生きて、はじめてわかることがたくさんありました。日本も事実上移民を受け入れる方針に入り、その傾向はこれからも上昇していきます。しかしながらニュースで見る日本の外国人労働者のニュースは凄惨たるものばかりです。ただでさえ外国で生きることはその地の人々の助けを借りてやっと成り立つものであるのに、それを足蹴にするように扱う人たちは私は許せません。このことはきっと、留学に行かなければ身をもって味わうことができなかつたことです。どの集団に属しても、マイノリティは生まれてしまうものだと思います。大事なことは、マイノリティを必然的に生まれてしまう存在として認識し、多様性を尊重し、彼らが寄り添える社会を作ることだと考えています。私にとってそれは寄り添ってくれた友人たちです。そして、今度はマイノリティとして生きたトルコでの 8 か月を日本にいるマイノリティの方たちに還元できればと思うようになりました。自分にとってそれは、外国から来た方々であったり、障害を抱えた人たちであったり、LGBTQ の人たちであったり、苦しい思いをきつと抱えて生きている人たちです。困ったらいつでも親身になって助けてくれたトルコの皆さんから学んだことは大きく、充実した留学生活を送ることができました。

報告書

ボアジチ大学交換留学 2018/9~2019/6

国際関係学部国際関係学科 4年

ボアジチ大学で過ごした一年は、私のいくつかの大切なことに関わる価値観を変えてくれました。

まず、学業の面では、では、トルコで一番偏差値の高い学校というだけあって生徒のレベルの高さには圧倒されましたが、彼らの実力はそれに相当する努力あってこそそのものなんだと、大学内で感じる事が多くありました。ボアジチの学生とはいえやはり多くの者にとって勉強とは、やはり進んでやりたいものではありません。さらに彼らにとっても母国語ではない英語でものすごい量の課題やスケジュールをこなすわけですから、その切れ端を体験したに過ぎないような私でもいかに彼らの学生生活が気楽なものでないかというのは分かりました。しかしそれらを諦めたり投げ出したりせずに、何時間かかっても必ずやり遂げる彼ら一人一人の様子がとても印象強く私の記憶として残っています。最もインスピレーションを受けた言葉は、No pain No gain (痛みなくして得るものなし)です。元々知っていた言葉でしたが、これは、日本語の勉強を文字通りコツコツと2年間続け日常会話程度の会話力を身につけたボアジチ生の友達と、ネイティブのような流暢なフランス語を操るトルコ人のフランス語教師が、それぞれ私にくれた言葉です。私も大学では授業についていくため、テストに受かるため、多くの時間を勉強に費やしました。頑張っても周りの優秀さには叶わないと思う事もたくさんありましたが、高校時代から大学までずっと努力を続けてきた彼らのストーリーを聞くと、やはり継続した努力がものをいうのだと、理解できました。それから日本帰国後から現在までも、自分の目標のために時間を作って勉強する習慣がついているのは、尊敬し憧れたボアジチの友達の存在が私の頭の片隅に存在し続けていることと、私の中で彼らによって実証された No pain No gain の言葉の重みを感じ続けているからです。

トルコではもちろん、勉強のみをしていたわけではありません。元々、宗教がどういうものなのかを知りたいという思いで、トルコを選びました。国際関係、国際政治を学ぶ過程で、常に出会うのが宗教問題です。事実として、世界には non-believers の数よりも believers の数の方が多いこと、そして宗教の対立が多くの戦争や問題を起こしてきて今後も無くならないだろうということを知っていても、では実際にこの宗教が何かということを知ろうとした時には、彼らと友達になること以外に他にない、という、ある本の一文を読んだ瞬間がきっかけとなりました。実際にトルコに1年間住むうちに、たくさんのムスリムと知り合いになり友達になり、計4つの家庭に泊めてもらう経験をするうちに、ぼんやりとイスラム教のことが分かっていききました。地域差、世帯差、世代差、もちろん個人差が大きく、ムスリム全体を一括りにはとてもできないと感覚として痛感する一方で、利己主義とは正反対の、他者思いで広い心が、彼らムスリムの根底に共通してあるものではないかと感じられました。それは時に海外メディアが描いてきたイスラム教のイメージとは重ならないものでした。そして彼らの信仰は各個人と彼ら

の信じる神の間に存在するものであり、他人に影響を与えるものではありません。私はトルコに行くまで、恥ずかしいほど宗教に無頓着であったためにこのような正しい見方を持っておらず、もしかしたら私自身、得体の知れないものから自然と距離を取ろうとしていたかもしれません。しかし今思うことは、世界の多数派がそれぞれの信教をもつ世の中で、国際関係を築く一個人として、宗教や信仰者らを自分には理解できない何かだとしてただ距離をとろうとする態度は、あまりに幼稚かつ潜在的な危険性を孕むものではないかということです。私は運良くトルコで1年を過ごしこのような知見を得ることができましたが、殆どの日本人がこのような経験をする機会がないのが事実です。異文化理解、グローバル化という概念が広まり続ける一方で、その中でも大きな位置付けを占める宗教というものについて、とりわけ私たちと地球を共有する何十億という信徒たちの実情を少しでも知るという機会が、中高の教育のほんの一部として取り入れられたらいいのに、そう考えるまでになりました。現に宗教そのものに対するバイアスを失った私は、今後世界で様々な信者と関わる機会があっても、一人一人を真の個人として、見ることができるのだろうと感じています。

私にこのような経験をさせてくれた静岡県立大学とボアジチ大学、現地で出会った友達への感謝を忘れことはありませんし、そこで得た新たな知見や考え方は、私自身の将来はもちろん、今後私と関わるだろう全ての人にも恩恵をもたらすものになるはずです。